泥沼化する支那事変

平成16年11月30日・袖ヶ浦公民館

きょうは、昭和十二年七月七日の七夕の夜、北京郊外盧溝橋で発生した発砲事件、この盧溝橋事件が、なぜ八年間にわたる日中全面戦争にまで発展してしまったのか。「泥沼化する支那事変」というテーマで話してみたいと思います。

元はと云えば、出先の軍隊の些細なトラブルでした。日本陸軍一個中隊が夜間演習をしている時、突然十八発ほど銃撃されたのですが、誰が発砲したのか。日本軍、あるいは中国軍、または共産軍の計画的な謀略的なものだったのか、それとも偶発的なものだったのか。真相は六十七年経った今も依然として謎のままですが、いずれにしろ発砲で死者が出たわけではなし、現地では間もなく停戦協定が結ばれました。時の内閣、近衛文麿内閣も「現地解決、不拡大」の方針でしたし、当事者さえその気になって解決しようとさえすれば、解決出来ないような事件ではなかったのです。ところが現地でトラブルが続くと、日本は内地から三個師団の派遣を決定、二十八日からの総攻撃で北京・天津地区を占領してしまいました。

陸軍は拡大派と不拡大派に割れていました。この機会に中国北部、華北の権益を広げようとする拡大派。これに対して参謀本部作戦部長の石原莞爾少将は、武力行使が泥沼の長期戦につながることを恐れていました。「ひとたび日中抗争に陥れば、果てしない荒野に無限の進撃命令を出すようなものだ」と云うのです。石原は、日本軍を満州国境の万里長城の線まで下げる。近衛首相が飛行機で南京に飛び、国民政府主席蒋介石とのトップ会談で一挙に解決を図る。思い切った提案をしたのですが、近衛は動きませんでした。たとえ話を纏めても、果たして陸軍がその条件を呑むかどうか。ハシゴを外されたら、徒に恥をかくだけだとためらったのです。近衛が国民の圧倒的な人気をバックに、リーダーシップを発揮していたら、盧溝橋事件は恐らくこの時解決していたでしょう。

華北での全面攻撃で、事態はまさに拡大派の望んでいた方向で展開したわけですが、拡大派にしても全面戦争を望んでいたわけではありません。「なあに中国軍は弱い。日本の一個連隊は向こうの二個師団に相当する。二、三個師団送ってガーンと一発食らわせれば、蒋介石は頭を下げるだろう」。楽観的な一撃論でしたから、内地師団派遣の際の命令でも、戦場は華北に限定し、「迅速なる一撃により敵の戦争意志をくじき、かえって全面戦争を避けることが出来る」と期待していたのです。陸軍大臣の杉山元も昭和天皇に、「支那は一か月で片付けてご覧

にいれます」と上奏していたくらいでした。

しかし、これは中国の抗戦力を余りにも低く見た、安易な情勢判断だったのではないでしょうか。抗日気運は中国全土を覆っていましたし、中でも中国最大の工業都市上海は、学生、労働者を中心とした抗日運動の拠点でした。日本政府も不穏な情勢に、揚子江沿岸の在留邦人二万九千人に上海引き揚げを命じ、八月九日には引き揚げを完了したのですが、その日の夕方「大山事件」が起きてしまったのです。海軍陸戦隊の大山勇夫中尉が自動車で上海市内を視察中、運転手と共に中国保安隊に射殺され、これが全面戦争の引き金になりました。

当時、北京、天津など華北は陸軍の担当、上海など華中は、砲艦で揚子江沿岸の居留民を守る関係から海軍の担当でした。海軍は陸戦隊を四千人に増強しましたが、五万の中国軍に包囲され、上海は一触即発の状態になったのです。十日の閣議で海軍大臣の米内光政は杉山陸相に陸軍部隊の動員準備を要請しましたが、石原作戦部長は「華北以外に出兵すれば全面戦争になる」と反対です。石原は「上海が危険なら、居留民を全部引き揚げさせたらいい。損害は一億でも二億でも補償しろ。その方が安くつく」。強硬に主張しましたが、結局は閣議で約束してしまった杉山の面子を考え、上海から先には軍を進めない。これを条件に、居留民保護のための必要最小限の兵力として、二個師団の上海派遣に同意したのです。

どうだったのでしょうか。盧溝橋事件が勃発した時、陸軍派兵に最後まで反対したのは米内海相でした。事件が拡大し、上海など華中に飛び火するのを恐れたのですが、その上海に派兵してしまえば、全面戦争になるのは火を見るより明らかなのです。米内はこの後、日独伊三国同盟に反対し、終戦の時も海軍大臣として和平に尽力した良識派の軍人です。見識といい、信念といい、私は実に立派な軍人だったと思いますが、「この上海派兵によって、全面戦争に拡大させた責任は大きい」と、米内の責任を指摘する人もいます。石原は「海軍はずるい。陸軍が強盗なら海軍は巾着きりだ」と怒ったそうですが、海軍は自分に関係ない時だけ「いい子になって」と云う意味です。しかし不拡大派だったその石原にしても、華北への内地師団動員に踏み切ったのは、「手薄のまま、万一包囲全滅させられたら」――この軍人の本能のせいでした。陸軍には陸軍の面目があったように、米内にしてもやはり海軍の面目があったのでしょう。

上海では十三日の夕方、中国軍が陸戦隊陣地を攻撃し、本格的な交戦状態に突入しました。閣議もこの日、陸軍派兵を承認、翌日深夜の臨時閣議で「帝国政府声明」を決定し、十五日朝発表したのです。日本はそれからちょうど十五年後に敗戦の運命を迎えるわけですが、「隠忍その限度に達し、支那軍の暴戻を膺懲し、南京政府に反省を促すため、断乎たる措置を取るの已むなきに至れり」。こう云うもので、これまでの「現地解決・不拡大」方針を捨て、全面的な軍事行動に転ずることを明らかにした、実質的には宣戦布告を意味するものでした。それを裏付

けるように、十四日、中国軍機が第三艦隊の旗艦出雲を爆撃すると、海軍航空隊は長崎県の大村や台北の基地から飛び立って杭州、十五日には南京などの空軍基地を爆撃したのです。東シナ海の洋上、片道一千キロの渡洋爆撃は世界でも初めてのことで、新聞には「勇猛果敢な荒鷲」の見出しが躍りましたが、航空部隊のことを「荒鷲」と云うようになったのも、この時からです。

国民政府も八月十四日、「抗日自衛宣言」をして全国動員令を発令しました。抗日統一戦線結成を目指す国民党と共産党の「国共合作」も、共産軍を国民革命軍に編入して第八路軍とすることで具体的に動き出しました。日本はこの「国共合作」の意味を、どの程度正確に理解していたのでしょうか。日本は中国に対する和平条件では、必ずと云っていいほど日中共同して共産主義を防ごうと、「共同防共」を申し入れています。それほど共産主義思想やその指導勢力には脅威を感じていたのに、中国共産党の持つ可能性となると余り強い警戒感は持たなかったようです。蒋介石との戦争継続が、まさか共産勢力を巻き込んだ民族戦争になるとは、思いもしなかったのです。これも中国認識がお粗末だったからでしょう。

九月二日には、それまで「北支事変」と云っていたのを「支那事変」に改めましたが、すでに全面戦争になっているのに、なぜ宣戦布告をしなかったのでしょうか。実は陸海軍が反対だったのです。陸軍次官の梅津美治郎中将、海軍次官の山本五十六中将、梅津は敗戦の時の参謀総長、山本はやがて太平洋戦争で連合艦隊司令長官として戦死しますが、二人が内閣書記官長の風見章の所へやって来て、「宣戦布告をすれば、外国からの軍需物資の輸入が不自由になり、国防力に大穴があいてしまう」。だから「宣戦布告は真っ平御免だ」と云うのです。鉄とか石油といった、戦争に欠かせない重要な原料は日本では取れません。盧溝橋事件の直前、アメリカから膨大な屑鉄と鋼管を買い付けていましたし、石油もアメリカと蘭印に頼っていました。山本は「艦隊一つ動かすにも、油の消耗が気に掛かってハラハラするくらいだ」と云ったそうです。

宣戦布告をすれば、戦時国際法で交戦当事国である日本と中国以外の第三国は中立を守らなければなりません。そして何よりもアメリカの中立法、これは昭和十年八月、アメリカが交戦国に武器や軍需品の輸出を禁止した法律ですが、この中立法が否応なしに発動され、戦争遂行に必要な軍需物資の入手が難しくなります。損得計算で利益より損失の方が大きい。こう判断したわけですが、日本の戦争を生かすも殺すも、アメリカをはじめ外国が握っているのです。日本の指導部がこの現実をしっかり認識していたら、とてもアメリカ相手の太平洋戦争には踏み切れなかったはずなんです。

支那事変の特徴と云うのは、まずそうした物資不足の中での戦争だったこと、そして「事変」という呼び名そのものにも、よく表われています。つまり戦争ではなく、あくまで一事変のレベルに押さえておいて、早く終結させる。日本はこの

段階でもまだ、軍事的に威圧すれば、事態を容易に、かつ短期間で収拾出来ると考えていたのです。ですから支那事変のほぼ全期間を通じて、軍事行動に平行して和平への試みが繰り返し繰り返し行なわれています。それがことごとく失敗に終わったのは、和平をしようと云うのに、あと一押し、あと一押しと戦線を広げていったからでした。次々と都市を占領すれば、戦果に対するそれなりの代償も欲しくなります。日本の要求もまた、軍事行動につられて過大なものになっていき、最後まで政略と戦略が一致することはありませんでした。

実は蒋介石が上海を戦場にしたのは、日本の物資不足と云う弱点をつく狙いがあったのです。盧溝橋事件が始まってから、米英は日本を非難こそしたものの、経済制裁はしてくれませんし、武力介入の気配も見せません。蒋介石がほしいのは言葉ではなく、効果のある具体的な援助でした。そこで全世界の注目をアジア最大の国際都市である上海の戦いに引き付け、日本の侵略に対する中国の抵抗をアピールする。何とか米英を味方に引き入れようと、一か八かの賭けに打って出たわけです。

上海の戦いは、蒋介石の決意を物語るように、最初から大変な苦戦になりました。松井石根大将を軍司令官とする上海派遣軍を編成し、名古屋の第三師団と善通寺の第十一師団を送り込んだのですが、二十万に増強された中国軍の抵抗は激しく、海岸に釘づけになったまま、上海市内に入ることさえ出来ません。九月に三個師団を増派しても、膠着状態は続きました。十一月に三個師団からなる第十軍を抗州湾に上陸させ、中国軍の側面を衝くことで、やっと上海地区を制圧出来たのです。苦闘三か月、戦死九千百人、負傷三万一千と云う大きな犠牲を出しましたが、新劇俳優の友田恭助伍長が戦死したのも、この上海の戦いです。十月六日のことで、読売新聞には敵前百㍍の最前線、たった一本残っていた煙草を、うまそうに吸う友田の写真が載っています。友田はその直後、クリークと呼ばれる運河へ突撃して、敵弾に倒れたのです。友田が召集令状を受けたのは、久保田万太郎や岸田国士らと文学座を創立する五日前、九月一日のことでした。それから一か月余りで戦死したわけですが、その模様を生々しく伝える読売カメラマンの記事と写真は、国民に改めて戦争の現実、そして厳しさを強く訴えることになりました。

上海での苦戦の最大の原因は、中国軍が極めて堅固な防衛陣地を築いていたのに、日本軍が全く知らなかった。この情報音痴にありました。無数に走るクリークを利用して、コンクリートで固めたトーチカ、塹壕、鉄条網を配置し、中国軍はそこに戦車を集めて戦ったのです。市街地のレンガやコンクリートの建物は、そのまま要塞となって日本軍を苦しめました。書記官長の風見の話だと、「陸軍はあれほど諜報機関に大金を投入しているのに、どうしたと云うのだ。政治家気取りで、国の政治ばかりに頭を突っ込んでいるから、そんなヘマをやるのだ」。

こんな非難の声が出たそうですが、これも地道な情報収集をおろそかにして、政治工作、傀儡政権作りの謀略に血道をあげていた結果でしょう。

こうした堅固な防衛陣地は、ドイツ軍事顧問団の指導によるものでした。ドイツは日本と日独防共協定を結んでいましたし、支那事変で日本を支持した数少ない国の一つです。それなのに、どうしてと思われるかも知れませんが、ドイツ陸軍は親中国路線でしたし、当時中国に軍事顧問団を送っている唯一の国でした。それは昭和三年、蒋介石の北伐、北方軍閥や共産軍討伐に軍事顧問を派遣した時から始まっているのです。第一次大戦で敗れたドイツにとって、陸軍将校に実戦経験を積ませることは、国防軍の再建強化に何よりの近道でしたし、鉄鋼産業にも兵器の輸出先が増えるのですから、歓迎するところでした。支那事変当時は、フォン・ファルケンハウゼン将軍を団長に三十数人のドイツ軍将校が上海防衛戦の指揮をとり、塹壕内で直接中国兵を指図したのです。日本の抗議にドイツ陸軍は、「個人契約で国民政府に雇われているのだ。顧問団を引き揚げても、ソ連の軍事顧問が取って代わるだけだ」と云ったそうです。しかも日本軍に大きな損害を与えた中国軍の新式兵器は、ほとんどがドイツ製でした。毎月香港ルートを通って六万トンも送られてくる武器・弾薬の六割が、ドイツからだったと云います。

ドイツがこうした親中国路線を一変させるのは、十三年二月にヒットラーがドイツ陸軍の実権を握り、リッベントロープが外相に就任して、対日提携を強化してからです。軍事顧問団を引き揚げ、五月には中国への武器輸出も全面禁止にしたのです。しかし、ドイツ陸軍が予測したように、ソ連はそれより早く十二年の十二月初めには戦闘機二十三機、爆撃機二十機を南京に送り込んでいました。名称こそ「ソ連航空義勇隊」、民間人の自発的志願の形をとっていますが、実際はソ連軍パイロットが日本の艦船を攻撃したのです。スターリンにとって、日本が中国との戦いで国力を使い果たしてくれるのは、ソ連の東方安定に何より望ましいことだったからです。

一方、華北でも戦線の拡大は続いていました。中国中央軍の北上が予想より早かったため、三個師団に続いて八月末には四個師団が増派され、北支那方面軍司令官には寺内寿一大将が就任しています。寺内に与えられた命令は「戦局終結の動機獲得の目的を以て、速やかに中部河北省の敵を撃滅すべし」。こう云うもので、参謀本部は石家荘以北に戦場を限定し、戦争終結のチャンスを掴むことを望んでいたのです。ところが日本軍は後退を続ける中国軍を追って石家荘を越え、その南二百キロの河北省南端にまで達してしまいました。「制令線」と云って、参謀本部が「進出はここまで」と指定した命令は、中国軍の退却戦法に乗せられて次々と破られ、いつの間にか限定戦闘のワクも外されてしまったのです。広大な中国大陸は、石原作戦部長が心配したように、まさにうわばみのように日本軍を呑み込んでいきました。十一月に上海作戦が終わった時、上海九個師団、華北七個師

団と十六個師団、陸軍に召集された兵隊は十二年だけでも四十七万人にものぼったのです。

戦争の規模はもはや日露戦争を超えており、前線からは弾丸不足を訴える声が相次ぎました。当時貯蔵していた弾薬は、たった八か月分しかなかったと云います。しかも物資不足の中の戦争拡大ですから、軍部としても軍需品の大規模な補給が課題となってきたのです。生産力を軍需に集中させるには、国民生活を統制する必要が出てきて、十月には企画院が作られ、「物動」と呼ばれる物資動員計画が動き出します。近衛内閣もこれに呼応するように、国民精神総動員運動を鳴り物入りでスタートさせました。「挙国一致」、「尽忠報国」、「堅忍持久」をスローガンに、神社への武運長久祈願や勤労奉仕、生産増強、さらには愛国公債の購入、貯蓄報国など、様々な形で国民に戦時意識を植え付けようとしたのです。九月議会も出征将兵感謝決議をして、事変の費用二十億二千万円を可決しました。

国内は「戦時色」一色に染まっていきます。盧溝橋事件から一週間後には、銀座四丁目の交差点に女性たちが出て、千人針に協力を求めました。東京朝日新聞は「千人針に示す銃後の赤誠」と伝えていますが、慰問袋を送る運動も盛んで、陸軍省だけで一年間に二百九万個も集まったそうです。八月からは映画の始めに「銃後を守れ」といったスローガン入れることが義務付けられました。しかし国民の戦争気分、戦勝気分を煽ったのは、何といっても新聞です。どの新聞も連日のように、「今や断固として膺懲を加えよ」とか「今は只一撃あるのみ」と、国論を戦争へ向けて統一していったのです。軍用機を贈る運動も各社競争でした。東京朝日だけで、十二年の年末までに六百十一万円を集め、二回に分けて九十機の飛行機を献納しています。

政府の言論統制も迅速でした。近衛首相は七月十一日、マスコミ代表四十四人を招いて協力を求めましたし、戦争に関する記事、写真は、事前、事後と二重の検閲が行なわれるようになりました。兵力や将来の作戦を予測させる記事は一切ダメ、新聞は伏せ字だらけです。お手元の資料に「上海上陸」の海軍省発表を載せておきましたが、まさに〇〇だらけ。見出しも「〇〇に上陸」で、これでは何のことかさっぱり分かりませんが、わずかに「上海特電」のクレジットで、「ああ上海に上陸したんだな」と想像出来る程度です。写真も「陸軍省検閲済」のスタンプが必要になり、戦車の写真は全て大砲の部分が消されてノッペラボーです。大砲の口径、砲身の長さから、戦車の性能がわかってしまうと云うのですが、日本の戦車はそんなに秘密にするほど上等な代物ではなく、やがてノモンハンではソ連軍にさんざんに叩かれ、兵隊たちが「お豆腐みたい」と嘆くことになります。戦地の新聞社特派員には「陸軍従軍記者」の待遇、つまり将校並みの待遇が与えられましたが、これも日露戦争以来のことでした。

言論統制を強化するため、内閣情報部を設置したのが九月二十五日です。情報

官には現役の軍人が数多く就任し、記事掲載の可否だけではなく、報道姿勢にまで踏み込んだ指導をするようになったのです。やがて昭和十五年には、職員百四十四人を擁する内閣情報局となり、報道、言論の一元的統制機関として言論界に君臨することになります。その内閣情報部の初仕事が、国民的な行進曲の募集でした。そのころ流行っている歌謡曲が軟弱だと、戦意を高揚させる勇壮な軍国調の曲を広めようと云うのです。五万七千五百七十八編もの応募があったと云いますが、一等総理大臣賞・銀杯・賞金五千円に輝いたのは、「見よ東海の空あけて」で始まる「愛国行進曲」、鳥取県で印刷業を営む二十三歳の青年の作品でした。作曲は「軍艦マーチ」の作者、退役の海軍軍楽隊長である瀬戸口藤吉の曲が選ばれ、暮れの日比谷公会堂の発表会はラジオで全国に中継放送されました。年が明けて十三年一月、レコード六社が藤山一郎、四家文子、長門美保といったそうそうたる歌手のレコードを一斉に発売すると、百万枚を超える大ヒットになったのです。出征兵士の見送りで盛んに歌われたのが、「勝って来るぞと勇ましく」の「露営の歌」です。東京日日、大阪毎日が募集した二等当選歌ですが、古関裕而作曲の哀調のあるメロディーが受けたようで、こちらも発売半年で六十万枚を超えたそうです。ＮＨＫでは時局番組にテーマ曲を流すことになり、放送第一回は信時潔が曲をつけた大伴家持の「海ゆかば」でした。この歌が太平洋戦争の戦局悪化と共に、玉砕報道のテーマ曲となったのは、皆さんご承知の通りです。

こうして、国民世論を戦争協力に纏めることには成功した近衛首相ですが、その近衛の憂鬱は陸軍の作戦計画がさっぱりわからないことでした。海軍の渡洋爆撃にしても、その日閣議があったと云うのに何の報告もなく、近衛は一般国民同様、翌日の新聞で初めて知る有様です。統帥権と云って、軍隊を動かす指揮命令権は天皇の大権だとして、軍部はこれを盾に軍事行動については政府には何も知らせず、独断で進めようとしたのです。これでは政府は外交方針も決められないし、財政計画の立てようもありません。そこで近衛は七月二十七日の閣議で、華北へ内地師団派兵を決めた閣議ですが、ある閣僚に「陸軍は大体どの辺で軍事行動を止めるのか」と聞かせたのです。陸軍大臣の杉山は黙ったまま、一言も答えません。陸軍は政党出身の閣僚から、軍の機密が政党に洩れることを極度に嫌っていました。見兼ねた海軍大臣の米内が「それは永定河と保定の間の線で止める予定だ」。お手元の地図をご覧になって頂くと、北京の南に保定がありますが、杉山は声を荒げて「こんな所でそう云うことを云っていいのか」と、米内を怒鳴り付けたと云うのです。「政党出身閣僚のいる所で」という意味でしょうが、それにしても閣議を「こんな所」とは。杉山をたしなめる、勇気ある閣僚はいませんでした。かって満州事変や第一次上海事変の時、陸軍をズケズケと批判した犬養毅や高橋是清のような、気骨のある政治家は近衛内閣には一人もいなかったのです。

仕方なく近衛は、天皇にすがりました。「一国の首相が軍の計画を知らされな

いのでは、国務の計画、実施が出来ない」と。天皇は「閑院宮参謀総長から上奏があった時は、それを自分から首相と外相に伝えよう」と云われたそうです。戦争と云う国家にとって一番大切な問題に、国務と統帥が離れ離れになっている。軍の作戦が天皇の口からしか聞けないようでは、とても政治が軍事をリードするどころの話ではありません。これが昭和日本の実情であり、太平洋戦争敗戦の大きな原因になっていきます。明治憲法は、天皇が統治権を総攬する形で政治と軍事が統合されてはいますが、その天皇は「輔弼」と云って臣下の助言、補佐を建前とされています。ところが天皇を助ける補弼機関が、国務事項は国務大臣、統帥事項は参謀総長、軍令部長と違います。昭和の軍国時代に入ると軍事優先で、その調整統合がうまくいかないと云う、明治憲法の欠陥が出てきたのです。同じ憲法の下で、なぜ日清、日露戦争がうまく行ったのかと云うと、首相であり、元老である伊藤博文が大本営の御前会議に出席して、外交と軍事の調和、政略と戦略の一致を図ったからでした。

そこで近衛は書記官長の風見と相談して、「首相を構成員とする大本営」の設置を陸海軍に働き掛けたのです。陸軍は最初は、大本営は戦争の時に設置するものだと、宣戦布告なしの大本営に消極的でした。ところが戦線が拡大し、北支那方面軍に続いて、上海派遣軍と第十軍を統合して中支那方面軍を編成すると、陸軍部内にも「二つの方面軍の大兵力を統帥するには大本営が必要だ」と云う声が出てきたのです。事変でも大本営を設置出来るように条令を作って、宮中に大本営が置かれたのは十一月二十日のことでした。しかし、首相を参加させることには陸海軍とも反対です。代わりに政戦両略にわたる重要な案件については、必要に応じて関係閣僚と統帥首脳の会議を開くと云うことで、大本営政府連絡会議を同時に設置したのです。近衛にとっては一歩前進でしたが、実際は近衛の要求を体よく断るための形式的な会議、作戦計画が知らされることはありませんでした。

近衛が戦時内閣強化のために考えたのが、もう一つ内閣参議の制度です。十月十五日に十人を任命しましたが、陸軍からは組閣の大命を受けながら陸軍の反対で首相になれなかった宇垣一成、皇道派の荒木貞夫と元陸軍大臣を並べ、海軍からは右翼の受けがいい末次信正大将、外交界からは国際連盟脱退の立役者、満鉄総裁でやがて外相になる松岡洋右など、各界勢力の均衡人事といった印象の強いものでした。近衛との昼食会という形で毎週一回、中国問題を中心に懇談しましたが、決議するわけでもなく、せいぜい近衛に進言する程度。有名人をズラリと並べるやり方に、朝日新聞の主筆緒方竹虎は「威容を張ることの好きな、いわゆる関白好み」と酷評していますが、内閣改造に備えた人材プールの狙いもあったようです。

十二月に内務大臣が病気で辞任すると、近衛はその後任に末次を起用したのです。末次は昭和五年のロンドン会議で、軍令部次長として軍縮条約締結に強硬に

反対し、連合艦隊司令長官になると「艦隊派」と云われる海軍強硬派の総帥に担がれた人です。近衛は参議就任を要請した時、「現役のままで」と考えていたのですが、海軍には「政治に関わるのは大臣一人」と云う伝統があります。海軍大臣の米内は、末次の参議就任を承諾する代わりにさっさと予備役にしてしまいました。近衛はそれを気の毒に思って末次を内相にしたのですが、この末次人事が近衛内閣の大きなガンになります。首相秘書官の牛場友彦は「近衛さんは、人事だけが総理の自由と云っていた。他のことはともかく、人事については人の云うことを聞かなかった。しかもアッと云わせようという気持ちがあったから、末次を内相に持ってきたりしたんだ。ともかく複雑な人だった」。こう云っていますが、末次は陸軍顔負けの強硬論で内閣を引っ張っていくことになります。

実は上海作戦が終わった十一月、日本は支那事変の行方を左右する重大な問題にぶつかっていたのです。敵の首都南京を攻略するかどうかです。国民政府は十一月十六日に南京を放棄し、揚子江上流・重慶への遷都を宣言していましたが、中支那方面軍の各師団は敗走する中国軍を追って一路南京を目指していました。「蘇州で止まれ」と云う参謀本部の指示は、ここでも南京一番乗りの先陣争い、功名争いの前に破られていきました。中支那方面軍司令官になった松井大将も、最初から上海だけですます積もりはなく、南京攻略を考えていたようです。近衛が出征見送りに東京駅へ行った時、松井は「自分は南京まで行く。総理も了解していてほしい」と云うのです。近衛が驚いて杉山陸相に質すと、「松井はああ云うが、とても南京までは行けない」と云う返事です。近衛は手記に「ところが実際には、南京はおろか漢口まで行ってしまった。情勢に引きずられてだんだん延びていったのだろうが、軍の無計画性がうかがえる」と批判しています。

この間、参謀本部の陣容も大きく変わっていました。病気療養中の参謀次長には多田駿中将が就任し、石原作戦部長は関東軍参謀副長に転出しました。拡大派の作戦課長武藤章大佐も戦争指導課長河辺虎四郎大佐と代わりましたが、武藤の行った先が中支那方面軍参謀副長でした。武藤は「南京をやったら敵は参る」と主張し、参謀本部にも南京攻略を強硬に具申してきたのです。石原に代わって作戦部長になった下村定少将、この人は敗戦後最後の陸軍大臣として陸軍の幕引き役を務めた人ですが、下村も支持しました。「敵国の首都攻撃は、単に軍事的観点だけではなく政治的な配慮も必要だ」。こう云って最後まで反対していた多田参謀次長もついに十二月一日、南京攻略命令を出したのです。

南京総攻撃は十日から始まりました。中国軍の主力はすでに南京から脱出していましたが、十三日に南京を占領すると日本国内はもう大変なお祭り騒ぎです。国会議事堂にはイルミネーションが輝き、全国各地で昼は旗行列、夜は提灯行列が繰り出しました。小学校一年生だった私も提灯行列をよく覚えていますが、十二月公演が行なわれていた歌舞伎座では、忠臣蔵大詰の場面になると、役者と観

客が一緒になって「南京陥落万歳」を叫んだそうです。

しかし日本中が戦勝に沸き立っている時、南京ではいわゆる「南京大虐殺」が行なわれていたのです。東京裁判では三十万人、いやそんな大虐殺はなかった、せいぜい三万か四万だ。あるいは虐殺そのものがなかったんだとか、今でもいろいろ論議され、中国の反日感情の大きな要因になっていますが、当時南京にいたマンチェスター・ガーデイアンの記者ティンパーリは、「外国人の見た日本軍の暴行」と云う本に、こう書いています。

「南京撤退の際の中国政府および中国軍隊の秩序は紊乱していた。多くの人々は、日本は従来とも秩序と組織を誇る国家であるから、日本軍の南京攻略にあっても、妙なことはあるまいと安心し、また戦争の緊張、空爆の危険も近く終わるものと考えていた。ところが日本軍の入城後二日間にして、我々の希望は無残にも破れてしまった。絶えざる虐殺、大規模な計画的掠奪、家宅侵入、婦女凌辱など一切は全て無統制であった。外国人居留民は事実その目で、路上に充満する死体を見た。南京中区では、辻ごとに必ず一個の死体が転がっていた。その大部分は十三日午後か夜間、日本軍の入城時に銃殺もしくは刺殺されたものである」。

明治三十三年、百四年前の義和団事件の時、北京を解放した日本軍は規律正しく勇敢でした。外国軍隊の掠奪暴行が横行した中で、「信頼出来るのは日本軍だけだ」と称賛されたものでした。中国人は軒下に、競って日の丸の旗を掲げたそうです。そうしておけば「この家には日本軍がいる」と、掠奪されないだろうと云うわけです。それから三十七年、その日本軍はどこへ行ってしまったのでしょうか。上海以来の激戦で多くの戦友を失っていました。平服を着た便衣隊のゲリラにも悩まされていましたから、復讐心も強かったでしょう。しかも南京目指して遮二無二に進撃したため、補給が追い付きません。日本兵は現地調達でやっと食糧を手に入れる有様です。現地調達と云うと聞こえはいいですが、実際は銃剣の力で否応なしに取り立てたものでした。しかし一番大きかったのは、上に立つ指揮官の姿勢だったのではないでしょうか。日露戦争の時には乃木希介といい、東郷平八郎といい、常に捕虜や非戦闘員の扱いに心を配っていました。乃木は旅順総攻撃のたびに、必ず各部隊に治安を取り締まる憲兵を用意させましたし、こうした指揮官の姿勢がそのまま軍隊の姿勢になったのです。「捕虜に食わせる物なんかないから捕虜は取るな」、つまり「殺せ」と云った師団長がいたそうですが、指揮官の質が段違いに悪くなっていました。

これは同盟通信上海支社長の松本重治が「上海時代」と云う本に書いているのですが、十八日午後から行なわれた陸海軍合同慰霊祭が「捧げ銃」で終わった時、軍司令官の松井大将が突然、将兵たちに訓示を始めたと云うのです。「お前たちはせっかく皇威を輝かしたのに、一部の兵の暴行によって一挙に皇威を落としてしまった。松井は泣きながらも、凛として将兵を叱っています。「何たることをお

前たちはしてくれたのか。皇軍として、あるまじきことではないか。今日より以後は、あくまで軍紀を厳正に、絶対に無辜の民を虐げてはならぬ」。松本は南京に来て同僚から「日本軍の進撃が早かったのは、将兵の間に『掠奪・強姦勝手放題』の暗黙の了解があったからだ」。こんな話を聞いて憤慨していた時でしたから、「松井さん、よく云ってくれた」と、傍にいた方面軍報道部長の深堀と云う中佐に「日本軍の暴行・残虐は、今世界に知られているんだ。日本軍の名誉回復のためにも、松井大将の訓戒のニュース世界に流したい」。こう頼むと、方面軍参謀から「そんな余計なことを流す必要はない」と反対が出ましたが、最後は深堀中佐が「君の意見は正しい。参謀が何と云おうと構わない。報道部長の責任で打電を許可する」と云ってくれたんだそうです。松本は東京に打電し、ロイター通信や英字新聞への配信を依頼しました。もちろん日本の新聞には一行も載りませんでしたが、上海の英字紙にはちゃんと掲載されたと云います。

その松井大将は東京裁判で死刑判決を受けた時、死刑囚の教誨師を務めた花山信勝東大教授にこう云っています。「私だけでも死刑になると云うことは、当時の軍人たちに一人でも多く反省を与えると云う意味で大変嬉しい」。非常に重い言葉です。私はこの松井の言葉からしても、三十万人はともかくとして、やはり「南京虐殺」はあったんだろうと思います。

南京攻略をしなかったら、どうだったのか。参謀本部の戦争指導班と作戦班の間で激論になりました。戦争指導班の堀場一雄少佐は、中国は面子を重んずる国だから、南京を攻略することなく和平の道を開くべきだ。進撃部隊は南京城外で止め、近衛首相が特使として南京に飛び、蔣介石とのトップ会談を実現させる。いわば「石原構想」の再現を提案したのですが、「南京陥落即ち蔣介石の屈伏」と主張する作戦班に敗れました。日本陸軍の組織的な欠陥は作戦重視、作戦参謀の発言力が圧倒的に強かったことです。明治の元老伊藤博文は「難しいのは軟論、軟らかい論を主張することだ」と、口癖のように云っていたそうですが、昭和の日本は「強いことさえ云っていれば正義の時代」になっていました。

近衛のブレーンである後藤隆之助も、「南京は攻略するな」と近衛に訴えた一人です。この人は落第を重ねて一高に七年間もいたと云う変わり種ですが、一高、京都大学で同窓の近衛が将来首相になった時のためにと、昭和八年、学者やジャーナリスト、若手官僚を集めて「昭和研究会」を作っていました。支那事変が始まると、とにかく現地を見てこようと中国へ出掛けたのですが、同盟通信の松本から「日本軍は決して南京を陥落させ、中国人の面子を失わせてはならない。これを落とさず、蔣介石と和議を結ばなければ収拾の道がつかなくなるだろう。これは和平の千載一遇の好機だ」と進言されたのです。同盟通信社長の岩永裕吉、日本の保健衛生の基礎を築いた長与専斎の子供で、東大総長をした長与又郎、作家の長与善郎の弟ですが、「ビスマルク的転換」と云うことを言い出していました。

プロシアとオーストリアの普墺戦争の時、プロシア首相ビスマルクはウィーン陥落を目前にしながら、包囲したままで入城せずに和平を結びました。これを徳としたオーストリアが、その後の普仏戦争、フランスとの戦争でプロシアに味方し、やがてドイツ統一に結びついたた故事に、日本は習うべきだと云うのです。

松本の進言に「もっともだ」と思った後藤が急いで帰国し、京都の都ホテルに滞在していた近衛首相を訪ねたのが十一月二十七日でした。後藤は「この絶好の機会を逃すな」と強く勧めたのですが、首うなだれて聞いていた近衛の返事は、「今の自分にはもはやそうする力がない」。後藤はその一言にがっかりし、帰京する夜行列車では一睡も出来なかったと云います。そして戦後、後藤は「なぜあの時、もっともっと近衛に食い下がって、南京攻略を阻止する決意をさせなかったか。千載の恨事である」と云っています。

実は日本は、この南京攻略戦の最中にドイツの中国大使トラウトマンを仲介にした、和平交渉を進めていたのです。「トラウトマン工作」と云われるものですが、蒋介石もその気になった、和平の可能性の極めて高いものでした。それだけに南京を攻略していなかったらと思うのですが、十分ほど休憩してお話します。

×　　×

昭和に入ってからの日本の脅威は、常にソ連でした。満州国を作り、満州に膨大な関東軍を展開させたのも、その脅威に備えるためでした。ところが支那事変が長引き、国内の弾薬庫が空っぽになりそうな事態になると、二、三か月で片付ける積もりでいた陸軍の拡大派、一撃派にも、「このままでは対ソ戦備がおろそかになる」と焦りが出てきました。首相、外相に陸海軍大臣の四相会議は、昭和十二年十月一日、事変を出来るだけ早く終わらせるため第三国の斡旋、特にドイツに期待する方針を決めたのです。

まず動いたのが、参謀本部の情報担当参謀馬奈木敬信中佐です。太平洋戦争のマレー・シンガポール攻略戦で山下奉文大将の下で参謀副長をした人ですが、ドイツ勤務時代から知り合いでドイツの日本大使館付武官になっていたオット少将に接触し、ドイツ斡旋の糸口を探りました。馬奈木は十月下旬、オットと共に秘かに上海に渡り、ドイツの中国駐在大使トラウトマンと会見して、動いてくれる感触を確かめて帰国したのです。ドイツが日中間の調停に乗り出すことになったのは、支那事変の拡大はソ連を利するだけであり、日本が国力を消耗すれば米英の牽制にも役立たない。こう云う判断があったからです。

広田弘毅外相はこれ受けて十一月二日、ドイツの駐日大使ディルクセンを招いて日本側の和平条件を伝えました。内容は、華北での非武装地帯の設定と親日的な行政長官の任命、上海非武装地帯の設定、反日政策の廃止、共同防共、日本商品への関税引き下げなど七項目です。広田は「戦争が継続される場合は、この条件ははるかに加重されるだろう」と脅しをかけましたが、ディルクセンが「これな

ら国民政府も、面目を失わずに受諾出来る」。こう云うほど満州国承認や賠償も求めておらず、大変ゆるやかなものでしたが、蒋介石はすぐには動きませんでした。蒋介石は、国際連盟に日本の侵略行為を提訴しており、連盟の勧告で九か国条約会議が十一月三日から、ベルギーのブリュッセルで開かれることになったからです。九か国条約と云うのは、海軍の軍縮を決めた大正十一年のワシントン会議で、日本をはじめアメリカ、イギリスなど会議に参加した九か国が、中国の主権と領土保全を尊重する。つまり侵略しないと誓った条約ですが、蒋介石はこの会議に期待をかけたのです。しかし日本が欠席した会議で、中国は対日経済制裁案を提案したのですが、何ら具体的な成果がないまま二十四日に閉幕してしまいました。アメリカとしても日本は石油、鉄鋼など重要な貿易相手国、対日貿易を止めればアメリカ経済の痛手が大きいのです。この時期、中国援助に積極的だったのはむしろドイツとソ連であり、アメリカ、イギリスが本格的に蒋介石援助に乗り出すのは、日本が南進、南へ進む姿勢を明らかにした昭和十四年から十五年にかけてなのです。

日本軍は南京に迫っており、米英は対日経済制裁をしてくれません。ソ連は軍事援助に熱心でしたが、蒋介石にとっては痛しかゆしの面がありました。援助と引き替えに共産軍との戦いを止めることを約束させられており、ソ連だけに頼っていると将来手足を縛られる恐れがありました。切羽詰まった蒋介石がトラウトマンに、日本側の条件を「和平を討議する基礎として受け入れる」と表明したのは十二月二日のことでした。蒋介石はその際トラウトマンに「日本は信用出来ないが、ドイツの誠意は信じている。本国政府に、終始公平な仲裁者として徹底して貰うこと、華北の行政権確保、この二点を要請してほしい」と云ったそうです。蒋介石の回答は七日、ディルクセン大使から広田外相に伝えられましたが、この時には日本側の態度は変わっていたのです。すでに南京攻略命令が出ており、陸軍だけではなく政府の中にも、蒋介石との交渉無用論さえ出ていました。広田の返事は「最近の情勢の変化により、先に示した条件は、もはや交渉の基礎となし得なくなった」と云うものでした。

この間、海軍軍令部の暗号班は中国外交部が海外大使に宛てた暗号電報を盗聴し、解読していました。日本との和平交渉に臨むかどうかは、英米仏の援助如何によって決まるとして、各国の態度を打診させたものです。この電報では「列国の援助がどの程度なのか未だに確実な表示がないし、日本側の条件は決して受けられないものではなく、ドイツ斡旋の好機を逃してはならない」としています。蒋介石が召集した幹部会議でも、「もしこれだけの条件なら、一体何のために戦争しているのかわからない」。こんな声さえ出ましたし、蒋介石も「これなら亡国的条件ではない」と、日本側の条件が変わらなければ、受け入れる覚悟を決めていたのです。

このトラウトマン工作の詳細を知っていたのは、陸軍でも大臣の杉山と軍務局長だけだったんだそうです。暗号盗聴で知った海軍は早速、「陸軍はまた内緒で支那とやっている」とねじ込んできましたが、参謀本部の戦争指導班にも初耳の話だったと云います。しかも暗号電報の内容は、明らかに蔣介石が弱気になっていることを示すものでした。陸軍部内では「この際だ。あれも取れ、これも取れ」と、いろいろな注文が出てきたのです。中でも強硬に賠償金を主張したのが陸軍次官の梅津です。「在留邦人はひどい目にあっている。賠償を取らなければ後の処理が出来ない」と云うのですが、本音は対ソ軍備拡張には賠償金が必要と云うことでした。事変を早く終わらせるためのトラウトマン工作だったのに、やめるには取れるものは取れるだけ取ってしまえと云う空気が急速に強まったのです。

新しい和平条件を審議するため、大本営政府連絡会議が開かれたのが十二月十四日です。南京陥落の翌日で、もう戦勝気分いっぱいでした。原案には賠償金など新たな要求が加わりましたが、それでも末次内相は「かかる条件で国民は納得するかね」と反対です。米内海相に「海軍はこんな寛大な条件でよいのか。華南に海軍基地として永久占領地を持つ必要がないのか」と言い出す始末です。書記官長の風見の心配は、華北の特殊権益拡大が新しい要求に入っていることでした。和平を成立させるには、満州国承認と反日政策放棄ぐらいの大まかな条件にしておかないと、話し合いにもなるまい。そう思って、「こう云う条件では、和平は到底成り立つまいと思うが、閣僚諸君はどう思われるか」と尋ねたのです。

みんな黙っており、責任者の広田外相も沈黙しています。しばらくして米内海相が「僕は和平成立の公算はゼロだと思う」と云うと、広田が「まあ三、四割はありはせぬか」、杉山陸相は「四、五割、いや五、六割はあろう」と云います。風見は「和平は、出来ても出来なくても構わぬと云うのなら別だが、是非とも成立させたいと云うなら、これなら出来ると云う見込みのある条件を決めるべきではないか。成立が疑わしいような案では、閣議の幹事役として閣議提案を引き受けるわけにはいかない」。こう云って和平条件案の練り直しを求めたのですが、まさに正論でしたし、風見の主張こそ広田外相が云うべきだったのです。

しかし近衛内閣にとって、蔣介石が交渉に応ずるかどうかは、もはや問題ではなくなっていました。南京攻略は、「力でねじ伏せられる」と云う幻想を抱かせてしまったのです。結局、強硬案のまま閣議決定され、広田が二十三日ディルクセン大使に伝えると、「これではとても中国の受諾は難しい」と云ったそうです。年が明けても中国側の回答はなく、「日本側の要求は抽象的だから、さらに詳細な内容を知りたい」と云ってきたのは、回答期限前日の十三年一月十四日でした。

翌日の十五日午前十時から開かれた連絡会議は、交渉打ち切りの政府側と継続を主張する参謀本部の間で、一日中激しい論争になったのです。広田は「長い外交官生活の経験から見て、引き延ばし戦術であり、和平解決の誠意のないことは

明らかだ」と打ち切りを主張します。杉山陸相も「蒋介石を相手にせず、屈伏するまで戦うべきだ」と、政府側は一致して打ち切り論です。これに対して参謀本部は、戦力の限界を痛切に感じていました。蒋介石と戦っている間に、共産軍はその勢力を華北全域に広げようとしており、ソ連軍も満州に軍事的圧力をかけてくる恐れがありました。多田参謀次長は「もっと具体的に示し、また条件を緩和してでも、あくまで交渉を継続して和平を成立させるべきだ」と、最後は同じ陸軍同士、杉山と多田が真っ向から対決する形でやり合ったのです。

すると広田外相が開き直ったように、「統帥部は外務大臣を信用出来ませんか」と切り出しました。米内海相も強い口調で、「政府は外務大臣を信用しております。統帥部が外務大臣を信用しないと云うことは、政府不信任である。それでは政府は総辞職せざるを得ない」と詰め寄ります。多田は「明治天皇はかって、伊藤博文公が辞めたいと云った時、『朕に辞職なし』と仰せられた。この国家重大な時に、政府が辞職するなどとは、一体何事でありますか」。涙ながらに反論したと云いますが、正午になっても結論は出ず休憩になりました。

一旦、参謀次長室に戻った多田を訪ねたのが、戦争指導班勤務の秩父宮少佐です。南京を攻略するかどうかで揉めている時、こんなことがありました。徹底した武力戦を主張する作戦班の服部卓四郎少佐、この人は、やがて日本が大敗するノモンハン事件で関東軍作戦参謀、太平洋戦争開戦の時には参謀本部作戦課長として陸軍の作戦を取り仕切った人ですが、攻略に反対する堀場少佐と激論になったのです。堀場は「武力戦は結局、泥沼戦争となって、際限のつかないものになる。第一、局地的勝利によって日本が得られるものは、一体何なのだ」と譲りません。二人は陸大三十四期、恩賜の軍刀組の親友でしたが、割って入ったのがやはり三十四期の秩父宮です。「日本が武力一点張りでなく道義を以て臨むなら、国民政府もこれに応えるのではないか。国家百年のためにも、何とか早期に和平解決を図る方法はないか」と云われたと云うのです。

秩父宮が多田を訪ねたのは、交渉継続か打ち切りかの論争を御前会議にかけて、天皇の平和への強い希望にすがろうとしたのです。立ち合った河辺作戦課長の話だと、「陛下の清らかな御心の鏡に映して、ご判決をお願いすべきだ」と、強く意見具申されたと云います。多田は感激の色を面に現わしながらも、「いかに国家の重大事とは申せ、陛下のご裁決を仰ぐと云うのでは、一切の責任を陛下に負わせる態度であり、輔弼の責任を放棄する違憲の行為です。殿下のご意見でも、これば かりは従いかねます」と、御前会議に反対の意見を述べました。黙念と聞かれていた秩父宮は「よくわかりました」と、多田に上官に対する敬礼をして部屋を出て行かれたそうです。河辺は「多田次長はやがてぽつんと呟くに云った。『有り難いことだ』と。時刻は午後二時であった」と書いています。

皆さんは思い出されることと思います。敗戦の時、鈴木貫太郎首相が御前会議

で、天皇の裁断を仰いで戦争を終結させたことを。あの時は敗戦必至、陸軍は本土玉砕を強硬に主張し、国家の存亡がかかっていましたが、この時は形の上では勝ち戦であり、多田もそこまでは決断がつかなかったのでしょう。多田は孤軍奮闘しましたが、夕方になっても結論が出ず二度目の休憩に入った時、軍務局長と陸相秘書官が訪ねてきました。「このままでは内閣総辞職になり、内外に及ぼす影響は重大であり、責任は統帥部にかかってくる」。こう云って多田の協力を要請したのですが、要するに政府側の圧力でした。ついに多田も折れ「今日の会議に同意することは出来ないが、反対もせず政府に一任する」となったのです。

しかし不思議なのは、この和戦を決する重大な会議だと云うのに、肝心要の近衛首相の顔が全く見えないことです。多田は「オレは本気で喧嘩したのだが、ある人が、近衛がしっかりしているなら、大体近衛公爵家など千年も続きはしないよ。それを相手にするのは間違っていると忠告してくれた」。「いい加減だから長持ちしているんだ」と云うわけですが、軍務局政策班長の佐藤賢了中佐、のちに東条英機首相の腹心として軍務局長になり、東京裁判で終身禁固刑になった佐藤の言葉が、問題の核心をついています。「陸軍が一致して打ち切りを唱えて政府に迫ったのなら別だが、用兵の主である参謀本部が継続を唱え、陸軍は真っ二つに割れていたのだ。その軍配は近衛が握っていた。もし、近衛がどうしても和平をしなければならないと思うなら、その軍配を参謀本部に上げさえすればよかったの」。本当にその通りでした。残念ながらムード、ポーズだけあって信念、決心のないのが、この貴公子のスタイルであり、そこに日本の不幸がありました。

このトラウトマン工作は、数ある和平工作の中でも、日本側の和平条件が蒋介石のもとに届き、一度は蒋介石がそれを受け入れた唯一のものでした。欲張った条件さえ追加しなかったら、和平の可能性が極めて高いものだったのです。それだけに外交をリードすべき外務大臣の広田が交渉打ち切りの先頭に立ち、海軍大臣の米内が内閣総辞職を持ち出して多田を押さえ付けた責任は、大変大きかったと思います。米内は満州事変以来、統帥権を盾に暴走する参謀本部に不信感を抱いていましたし、「陸軍のやつらは何をするかわかったものじゃない」とも云っていました。ところが今度は、その参謀本部が和平のために「交渉を継続すべきだ」と云っているのです。確かに米内が参謀本部側につけば、閣内不一致で内閣総辞職の恐れがあったかも知れません。しかし米内が事変の早期解決を願うなら、やはり多田を支持すべきだったのです。

近衛内閣は翌日十六日、ディルクセン大使に交渉中止を通告、「爾後国民政府ヲ対手トセズ」の有名な政府声明を発表しました。しかし、これほどバカな声明はなかったでしょう。現に国民政府と戦っているのに、これを相手にしないで、どうやって解決しようと云うのでしょうか。元老の西園寺公望は、「大きな失策だ。日清戦争にしても、李鴻章をつかまえたからこそ、話が出来たのだ。相手に

しっかりしたものをつかまえて、それと話をつけることが定石ではないか」と、目を向いて怒ったそうです。戦後首相になった東久邇宮も、国民党宣伝部長の周仏海が「蒋介石をして大いに憤慨せしめ、彼をして最後まで抗戦する決心を固めさせてしまった」。こう話したことを日記に書いています。近衛内閣自ら事変解決の道を閉ざし、泥沼に踏み込むきっかけになった声明でした。

この声明文を作ったのは佐藤賢了中佐ですが、相手の文字に「対」の字を使っています。何とか表現を弱めたものにしいと、外務省が知恵を絞って「否認ではなく、対話する相手でない」と云う意味で、「対」の字にすることを申し入れたんだそうです。ところが二日後には、陸軍の要求で「否認すると共に、これを抹殺せんとするものである」と、かえって強い補足説明が出てしまいました。その背景には南京陥落の翌日、北支那方面軍が北京に作った傀儡政権、中華民国臨時政府を盛り立てていく。蒋介石政権はもはや奥地の一地方政権に過ぎないから、それを否認して、代わって中央政権にしようと云う、陸軍の意向が強く働いていたのです。行政委員長には王克敏を立てましたが、日本人顧問が実権を握り、日本の号令一つで動くようにする、華北を「第二の満州国」にしようと云う、陸軍お得意の傀儡政権でした。近衛首相にも全く寝耳に水の話で、「余計なことをする。和平交渉の邪魔になる」と怒りましたが、結局は事後承諾させられました。この政権が十五年三月、南京に成立した汪兆銘政権に吸収された時、王克敏は汪兆銘に云ったそうです。「私は今日本軍に捨てられるが、次はあなたの番ですよ」と。

こうして和平最大のチャンスを逃した日本は、昭和十三年から長期戦体制に入り、軍需優先の物資動員計画が動き出します。戦争経済運営の基本となったものですが、対象品目は九十六。新聞には「もめんよサヨナラ！ 我れにス・フあり 戦争だ、着けよ国策の衣裳」。こんな見出しが出ていますが、国民生活はスフや木炭自動車など「代用品時代」になります。スフは第一次大戦中、ドイツが開発した人造繊維ステープル・ファイバーの略語で原料はパルプです。綿製品の規制で使われるようになりましたが、水や摩擦に弱いので洗濯は主婦泣かせ。「スフはすぐダメになる」と、粗悪品の代名詞になりました。木炭車の方はガソリン切符制で、まず東京市内のバスに登場しましたが、スピードが出ず、急な坂道ではすぐエンコ。こちらは「グズ、のろま」の代名詞です。電力節約が叫ばれ、私なんかもその一人でしたが、子供たちはパーマネント姿の女性を見かけると、「パーマネントはやめましょう」などと憎まれ口を叩いたものでした。

四月一日には総力戦システムとも云うべき、国家総動員法が公布されました。日本の総力を戦争遂行に向けるため、政府に強力、広範囲な統制権限を与えようと云うものですが、この審議のさなかに起きたのが、佐藤賢了中佐の「黙れ事件」です。佐藤は政府委員ではなく単なる説明員でしたが、延々と政策論をぶったものですから、政友会の宮脇長吉代議士が「委員長、この者にどこまで答弁させる

のか」と遮ったのです。すると佐藤が「黙れ！」と一喝したため、日頃軍部には低姿勢の議員たちも憤慨し、大騒ぎになりました。佐藤の話だと、「宮脇の激しい野次に頭にきていたから、『黙れ！長吉』と怒鳴りかけたのを、辛うじて場所柄を考え、後の長吉を飲み込んだんだ」そうです。それでも翌日、杉山陸相が遺憾の意を表しただけで落着し、佐藤は意気揚揚、議事堂の廊下を闊歩していたと云います。軍部全盛、議会の権威失墜を象徴するような出来事でした。

戦勝気分に沸く十三年の新年早々、世間をびっくりさせたのは人気女優岡田嘉子のソ連亡命です。一月三日、演出家の杉本良吉と共に樺太国境を越えたのですが、実際のソ連は憧れの国ではありませんでした。杉本はスパイ容疑ですぐ銃殺され、岡田の方は、捕虜になって日本向け放送のアナウンサーをしていた滝口新太郎と結婚しました。昭和四十六年に滝口が亡くなると、岡田が翌年、遺骨を日本の墓に納めるため一時帰国したのは、皆さんご承知の通りです。二月には、石川達三の「生きてゐる兵隊」を連載していた中央公論が発禁処分になりました。石川は中央公論の特派員として南京攻略戦に従軍しましたが、非戦闘員に対する掠奪、暴行の描写が反戦気運を煽るとされ、禁固四か月の判決を受けています。東京オリンピックも「幻のオリンピック」になりました。ＩＯＣは昭和十五年の東京開催、冬の大会も札幌と決めましたが、競技場建設の資材が手に入りません。鉄材五千三百トンを一部木材にして六百トンにしましたが、それさえ無理とあって、七月十五日の閣議は「戦時下」を理由に中止を決定したのです。それでも国民は、日増しに窮屈になっていく暗い現実を紛らすかのように双葉山破竹の六十九連勝、田中絹代、上原謙、佐分利信の松竹映画「愛染かつら」に熱狂したのです。「花も嵐も踏み越えて」の主題歌が大流行し、続編。完結編合わせて観客動員実に一千万人、空前の大ヒットになりました。

この間参謀本部は、消極持久方針を立てていました。七月に六個師団が新設されることになっており、それまではソ連に備えるためにも積極攻勢作戦は行なわず、まず戦力の充実を図ろうとしたのです。ところがこの戦線不拡大の方針は、新しく作戦課長になった稲田正純大佐によって破られました。四月七日、まず徐州作戦の実施が命令され、さらに新設師団の編成が終わり次第、広東・武漢作戦を発動して、中国軍の主力を撃滅することで事変の早期解決を図ると云う、積極作戦に切り替えられたのです。稲田は戦後のテレビ番組で、「近衛声明の後、政府と統帥部、陸軍と海軍、それに参謀本部と陸軍省も具合が悪い。終始手詰まりになっていて、これを何とかするには武力戦しかない。思い切り作戦をやって、蒋介石にあきらめさせる。その手始めとして、別々になっている北支那方面軍と中支那方面軍をつなごうとしたのが、徐州作戦だった」と云っています。

徐州と云うと、「徐州、徐州と人馬は進む」の歌、そして火野葦平が「麦と兵隊」に書いた「ただ茫漠たる麦の海で、これから先どこまで続いているものやら想像

もつかない」。この一節を思い出される方が多いと思います。火野は応召直前に書いた「糞尿譚」が芥川賞に決まり、徐州作戦の陣中での受賞が話題になりました。しかし徐州の牧歌的な農村風景は、激しい砲撃が雲を呼ぶのか、ひとたび雨が降ればたちまち泥濘に変わり、「どこまで続くぬかるみぞ」となったのです。その行軍は辛く、兵隊たちは「倅は歩兵だけにはするな」と話し合ったそうです。徐州作戦のきっかけは、徐州東北三十キロの台児荘での敗退でした。この戦闘で負傷して「分隊長の手記」を書いた兵隊作家・棟田博は、毎日のように戦死者が出て、「これはとても生きていらない」と思ったそうです。連日連夜、手榴弾の投げ合いの白兵戦で、「日本陸軍初めて」と云われる退却でした。やがて四十万の大軍が徐州に集中していると云うので、と包囲殲滅を狙って復讐戦となったのですが、五月十九日に徐州を占領した時には、町の中はからっぽ。袋の鼠と思っていた中国軍はすでに包囲網を逃れて撤退しており、いたずらに戦線を拡大したに過ぎませんでした。

さて近衛首相です。近衛もバカではありませんから、「対手トセズ」が間違いだと気が付くのに、時間はかかりませんでした。近衛自身、手記に「識者に指摘されるまでもなく、非常な失敗であった」と誤りを認めています。ただこの人が面白いのは、一番の責任は自分の優柔不断、指導力のなさにあったのに、悪いのは広田外相であり、杉山陸相だとなるのです。そこで四月に入ると、「相手にする」方針に切り替えるため、内閣改造を考えるようになります。とはいっても、陸相更迭は容易なことではありません。陸軍には三長官一致の原則、陸軍大臣は大臣と参謀総長、教育総監一致の推薦を必要とする原則があります。それどころか、陸相が辞めて後任を送らないと云えば、内閣を倒す力も持っているのです。

近衛の杉山更迭の希望は、天皇から閑院宮参謀総長に伝えられました。近衛は天皇の前でイスを賜るのはもちろん、足を組んで気楽に愚痴やら世間話が出来るのは、この人だけだったと云います。さすがは五摂家筆頭の家柄です。閑院宮も近衛の支持者で、「近衛のやりいいようにしてやるがいい」との考えでしたから、杉山に辞職を勧めたのですが聞きません。最後はあけすけに「辞めた方がいいぞ」と強引に引導を渡したのだそうです。近衛の意中の陸相は、第五師団長として徐州で戦っている板垣征四郎中将でした。板垣は満州事変の時の関東軍高級参謀、作戦参謀の石原莞爾と満州事変を起こして、「知謀の石原、実行の板垣」と云われた仲です。近衛は、石原は作戦部長の時不拡大方針だったから、中国政策転換のため、板垣なら石原の不拡大方針を実行してくれるだろう。実に単純なものですが、そう考えたのです。近衛と云う人は、こう云うことにかけては周りがびっくりするほど積極的な人でした。使者として、板垣と親しい同盟通信主幹の古野伊之助をわざわざ戦場に送り、陸相就任の内諾を取り付けたのです。

外相には宇垣一成に就任を要請しましたが、宇垣は四つの条件を出しました。

内閣の統一強化と対中国外交の外務省一元化、国民政府と和平交渉を再開し、そのためには「対手トセズ」の声明には、こだわらないことです。近衛も「あの声明は余計なことを云ったのですから。しかし、うまく取り消すように」と云ったそうです。六月三日、板垣陸相の親任式を終えた近衛は、「これで事変の拡大を防ぎ、一挙に解決を図ることも可能かも知れない。随分苦労したが、苦労のしがいがあった」と、大変なはしゃぎ様だったと云います。しかし元老の西園寺が「近衛は道具立てのみに一生懸命だが、もっと全責任を負って自ら敢然としてやることだ」。こう云ったように、近衛に大切だったのは、他人任せでなく、自分が責任を持ってぶつかることだったのです。近衛はいつもそうでしたが、何か障害にぶつかるたびにだんだんその熱も冷めてしまい、この内閣改造も事変解決に効果を上げることは出来ませんでした。

まず板垣の誤算です。近衛の「板垣執着」を知った陸軍次官の梅津は、板垣が大臣になっても何も出来ないように、先に自分が辞任して、次官にはいわば一心同体の東条英機、戦争中首相になる東条を据えておいたのです。次官人事は内閣に事前了解を求めることになっていましたが、陸海軍だけは例外でした。板垣にしても、次官に石原を持ってきたくても、なったばかりの東条を替えるわけにはいきません。梅津は「あの二人を一緒にしたら、二が二ですまず、三にも四にもなる。何をするかわからん」と、石原阻止の先手を打っていたのです。板垣は東条の完全なロボット、陸軍の強硬意見を主張するだけになってしまいました。近衛は惚れ込むのも早いが飽きるのも早い人で、天皇に板垣のことを「会ってみたらぼんくらな男だった」と云ったそうです。天皇も「近衛はすぐ変わる」と苦笑されたと云います。

宇垣の方は、わずか四か月で外相を辞任してしまいました。近衛は「事変を解決出来るのは貴方しかいない。貴方に任せる」と云って外相に迎えたのに、助けるどころか、むしろ足を引っ張ったのです。宇垣は就任早々、外国人記者団との会見で「対手トセズ」の声明を修正する可能性を示唆しました。これを日本の外交方針変更のサインと受け取ったのか、国民政府行政院長、日本で云えば首相にあたる孔祥熙の密使として、秘書の喬輔三が香港総領事の中村豊一を訪ねてきたのです。六月二十六日のことで、七月十九日まで六回の会談が行なわれましたが、孔祥熙が出してきた和平条件は、満州国は日満中三国条約締結により間接的に承認する。つまり「満州国承認」と云う言葉は使わなくても、満州国と条約を結べば中国が国家として認めたことになるからです。共産党との関係は清算するが、華北の特殊地域化や賠償金支払いは難しいと云うものでした。日本にとって決して不利な条件ではありませんでしたが、大蔵大臣を加えた五相会議では、「蔣介石の下野」が交渉開始の前提条件だと確認されてしまったのです。近衛声明の面子にこだわり、「対手トセズ」の看板をすぐ下ろすわけにはいかなかったのかも知れ

ませんが、結局はこの声明が重い足枷となりました。

孔祥熙は「蒋介石が身を引けば、国内を纏めるのが難しくなる。自分が全責任をとって下野する」と伝えてきました。中村総領事も帰国して宇垣を説得し、宇垣も何とか「下野要求」を外させようとしたのですが、陸軍の反対でダメでした。陸軍省と参謀本部の会議では、堀場少佐が「蒋介石を事前に下野させた場合、我々は一体誰を相手に停戦するのか。中国で停戦を実現出来る実力者は、蒋介石しかいない。しかも停戦後、蒋介石を下野させるかどうかは、あくまで中国の内政問題であって、日本が干渉すべきことではない」。こう主張したのですが、東条陸軍次官の「ならぬ。陸軍大臣の命令としてもよい」の一喝で斥けられたのです。実に詰まらないことにこだわったものですが、孔祥熙は九月一日「蒋介石の下野を前提とした交渉には応じられない」と、交渉打切りを通告してきました。それでも宇垣はあきらめずに、海軍の軍艦上で孔祥熙と直接交渉するプランを立て、五相会議の了解も取り付けたのですがが、その宇垣が九月三十日、突然外相を辞任してしまい、孔祥熙工作は挫折したのです。

宇垣が辞任したのは、陸軍が中国問題の統一機関として興亜院を作ろうとしたためでした。北京の臨時政府に続いて、三月には南京に中支那方面軍の指導で維新政府が出来ており、こうした新興政権、さらには占領地の国策会社を指導する統一機関が必要だと云うのです。つまり、外務省から中国問題を取り上げてしまおうと云うのですから、宇垣は強硬に反対しました。ところが近衛首相は、宇垣との「外交一元化」の約束に背いて、興亜院設置に賛成してしまったのです。宇垣の失望は大きく、長男の一雄は「大命拝辞の時よりも、むしろ外相辞任の時の方が、おやじは自殺するのじゃないかと思った」と話しています。西園寺は「まあ、近衛が宇垣をいやになったんだな」と云ったそうですが、近衛には、野心家の宇垣がこの孔祥熙工作をテコに首相をとって代わろうとするのじゃないか。そんな警戒心があったと云う人もいます。それに陸軍の反発の強い宇垣では、たとえ孔祥熙と話を纏めても、陸軍の抵抗を押し切って進める自信が近衛にはなかったのでしょう。

この孔祥熙工作と平行して、国民政府のナンバー2である汪兆銘の担ぎ出し工作が、陸軍によって密かに進められていました。現地軍が作った傀儡政権は基盤が弱く、とても民衆の心を掴むことが出来ません。しかも重慶の国民政府の抵抗は強く、汪兆銘を離脱させることにより、蒋介石政権の分裂を図ろうとしたのです。汪兆銘は「日本なければ中国なし、中国なければ日本はない」と、日本との「和平救国」を唱えていましたから、陸軍省軍務課長の影佐禎昭大佐は同盟通信の松本らを通じて、汪兆銘派と接触を保っていました。外交部の前亜州局長、日本で云えばアジア局長の高宗武が秘かに来日し、板垣陸相らに会ったのは七月のことです。ただ不思議なのは、宇垣外相には一切内緒で、もちろん会わせてもいま

せん。これを見ても、和平工作がいかにてんでばらばらに、それぞれの思惑で行なわれ、明確な国策がなかったことが分かります。

十一月三日、近衛内閣は日本の戦争目的が「東亜永遠の安定を確保すべき新秩序建設」にあるとして、「東亜新秩序声明」を出しました。そして「国民政府といえども、新秩序建設に参加するなら拒否するものではない」と、いわば「対手トセズ」声明を修正したのですが、汪兆銘への誘い水でした。二十日には上海で影佐大佐と高宗武の間で「日華協議記録」が調印され、汪兆銘が蒋介石が訓示しているすきを見て、飛行機で雲南の昆明へ脱出したのは十二月十八日のことでした。ハノイに着いた汪兆銘は蒋介石に和平勧告をしましたが、蒋介石は汪兆銘を反逆者として党籍を剥脱しました。しかも中国での蒋介石の声望は圧倒的で、汪兆銘の呼び掛けに応じてついてくる者は少なく、陸軍の目論みは崩れたのです。汪兆銘は十五年三月、南京に国民政府を樹立しましたが、日本側が協議記録で約束した「二年以内に撤兵」がいつまでも実行されないのに、悩んでいたと云います。

この間、日本軍は広東、漢口を占領し、その都度日本国内は祝賀の旗行列で埋まりました。しかし日本が占領したのは、云ってみれば大都市の点とそれをつなぐ鉄道の線だけ。中国の民心を掴むと云う、面で押さえるところまでは、とても行かなかったのです。中国には二十四個師団が展開し、満州に八個師団、朝鮮に一個師団。日本国内には近衛師団を残すだけで、台湾に至っては軍司令部こそあるものの、手持ちの動員可能師団ゼロと云う大変お寒い状態でした。そして中国軍はどんどん奥地へ逃げてしまい、日本は手のつけようのない状態なっていたのです。

支那事変早期解決の期待は薄れ、近衛内閣が総辞職をしたのは十四年の一月四日でした。堀場少佐は「近衛総理は百万の大軍を野曝にして逃亡せり。斯くして事変何処に行く」と書いています。確かに支那事変の八年間は、事変を早期に処理しようとして躓き続けた惨憺たる「失敗の歴史」でした。堀場は大佐で敗戦を迎え、昭和二十八年、五十三歳の若さで亡くなりましたが、遺書とも云うべき「支那事変戦争指導史」を残しています。その中で第一に挙げているのが、政略戦略を統一した戦争指導力の欠如です。支那事変中に内閣が替わること五度、太平洋戦争の間に四度に及び、方針の一貫性がなかったことを指摘しています。堀場は「全体として誰が一貫して責任を負うべきやを借問する場合、事態は自ずから明瞭なり」。こう書いていますが、この間中国は蒋介石ただ一人でした。そう云えば、元首相の中曽根康弘さんが以前テレビ番組で、日本に国家的戦略がないのは「クリントン政権八年の間に、日本では首相が八人も代わっているからだ」と云っていましたが、相変わらず同じことを繰り返しているわけです。

堀場はまた「戦争指導の破壊者は作戦当局だった」とも云っています。統帥権の独立は軍事優先となり、軍の中でも作戦中心の機密思想で他の容喙を許さず、独

断専行となった。南京攻略戦はその典型としています。そしてもう一つ、私が支那事変泥沼化の原因を挙げるとすれば、政治力が余りにも弱かったこと、近衛首相、広田外相にリーダーシップがなかったこと、さらに日本人全体にあった中国に対する優越感、大国意識だったと思います。